



一夏会報



鶴見大学学長
柳澤 慧二

デジタル・イミグラント

皆さんがこの文章を読まれるところは随分涼しくなっているはずですが、それにしても今年の夏は暑かったですね。暑さに負けずに夏期講習を受講されて、見事に目的の資格を手に入れたことをお喜び申し上げます。この会報の題になつて「一夏」とは、仏教で陰暦4月16日から7月15日までの90日間、僧がこもつて修行する「夏安居」のことですが、皆さんの夏期講習はまさに夏安居に相当するとしてつけられた名前です。

皆さんがこの文章を読んできたように思いますが、デジタル・デバイスという言葉があまりにもよく使われていて、次々に登場するデジタル機器、そして新しい機能についていくのは大変なこととす。年をとって保守的な考えになつてくると、いつもこの感が強まりま

す。ところで昨年夏のこの会報（「一夏会報」56号）に慶應大学加藤好郎先生の書かれた文章があります。その中で「米国の図書館界では23歳以下の若者を、デジタル・ネイティブと呼び、それ以上の人々をデジタル・イミグラントとよんでいる」とありました。わが国でもその通りかどうかわかりませんが、全てのデジタル機器を使いこなすという意味ではその通りでしょう。新しいことを受け入れるとき、以前にアナログの同じような機器を使ったことのない人のほうが素直に受け入れることができるでしょう。私は、テレビ、ビデオ、カメラなどで自分がまさにイミグラントであると納得しています。

まだ使えるのに、もったいないという気持ちがある、新しいことへの挑戦にブレーキをかけてしまったり、そして、気が付いたときは時代遅れになってしまいます。その疎外感にまさに40年前、アメリカに留学していたとき、英語が自由に使えなくて感じられた外国人の疎外感です。図書館の資料が電子化されて、保存も整理も容易になることは大変ありがたいことです。しかし、資料はもとのままの形であることが必要な場合も多いでしょう。これからできてくる資料は電子化されたものである場合が多くなるでしょうが、歴史的な資料としては紙に書かれた物が主流でしょう。図書館はこの両者に対応しなければなりません。

話があれこれしますが、デジタル技術の進歩によって会議の資料を作ることが容易になり、資料が沢山配布されるようになり、また新しい資料が配布されます。どこを直したか明らかでない、前の資料はすべて廃棄することになり、紙の需要は以前より多くなつたという、笑えない話になります。そこで必要になつたのは、いかに捨てるかという技術です。古いものはほとんど捨てるというのが、私のような立場の人間には必要なことです。ところが、夏休みに数年前の資料をとりだして、無作為に読んでいるうちに、いろいろ役立つものがありました。捨てるということとは難しいことです。と



主任教授
岡田 靖

図書館って

何だろう

特別暑かった今年の夏。その一夏を皆さんは図書館員を目指して頑張ったことありましたか。そして目指す先にあるものが図書館です。その図書館という皆さんは、どのようなイメージを持っていますか。もちろん図書館概論等で「図書館とは」ということを学ばれてきました。それによつてずいぶんイメージが変わってきたのではないのでしょうか。それは皆さんが専門家の入り口に立たれたということだと思います。

では専門的な見方を離れて、ごく一般的にはどのようなイメージが持たれているのでしょうか。例えばワードのクリップアートで「図書館」と入力して検索をかけて出てくる図の説明を見ると「学業」「勉強」「教育」といった類の言葉が必ず含まれています。どうも世の中の図書館を見る目とは、現在でもそのような方向に向いているのではないのでしょうか。確かに、一昔前の図書館というところのようなイメージがあつたかもしれません。私が初めてこの世界に足を踏み入れた約40年前には、図書館というと、静かで、物音一つしない中で利用者が読書や調べ物をしているという風景

が普通でした。正直なことを言えば、大学生の頃ほとんど授業にも出ず、野球のコーチに明け暮れていた私にとつて、もつとも苦手な風景でした。たまにしか行かない図書館というと、友達との待ち合わせ場所であり、スポーツ新聞を読みに行くところでした。それなのに、この様な世界に入つて大丈夫だろうか、という不安な気持ちになつたことが思い出されます。それよりさらに前の、私がまだ高校生の頃は公共図書館（当時はそのような呼び方も知らなかった）の数も少なく、住んでいる杉並区には荻窪に

あつた荻窪図書館？（と聞いたような気がしている）一つしかありませんでした。一度だけ野球の練習が休みの時に野球部の連中と行つたら、順番待ちの真面目な高校生と思しき人たちが沢山いて、我々はすぐに引き返したものでした。当時は住宅事情も悪く、公共図書館は真面目な高校生や大学生たちの勉強部屋と化していました。そのような私が、いま司書養成の教員として教壇に立っているのも、何か不思議な感じがしないでもありません。それは余計なこととして、その時代から現在まで図書館のイメージは同じなのではないでしょうか。

書写材料のほとんどが紙であつた時代から、フィルム、レコード類の出現、そして電子出版物へ、さらにインターネットへと時代は変化してきています。そのような時代において、図書館は一般的には昔と同じイメージで見られているように思われます。時代の先端にあるアプリケーションにおいても、その様なイメージというのはいささか？というか想像通りといいましようか。

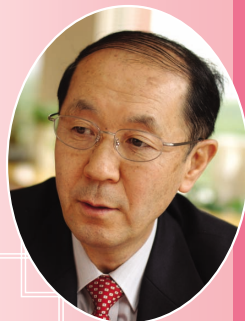
本来、図書館というところはもっと楽しいところではないのでしょうか。情報の発信基地など色々といわれていますが、しち面倒くさいことは抜きにして、来られる方々に来て良かったな、また来たいなあと思つていただく場所ではないでしょうか。前述したように私自身が図書館なんて堅苦しくて、行くのは面倒臭いし、真面目な奴が勉強する場所だと思つていたので。しかし、図書館に関する勉強をしていくに従つて、そうではない図書館の姿が見えてきたのです。それは、もしかすると先人（私の父も含めて）の目指すものとは異なっているかもしれないかもしれません。私だけが思つている図書館のイメージかもしれないが、資料を検索することか、情報を求めるということも大切ですが、図書館は、

いろいろな夢を内蔵したもの（それは図書又は本、情報を蓄積している資料などという無粋なものではない）が溢れんばかりにある場所であり、そこに、昔からあつた楽しいものをさらに楽しくしてくれるコンピュータというもう一つの夢の道具が導入されたのです。

この様な楽しいところが図書館ではないでしょうか。それは、姿を変えて電子化されようが関係ない、楽しい場所のはずです。

そのような楽しい場所を提供するために、皆さん方がいるのです。今後の健闘をお祈りします。





川村学園女子大学教授
齋藤 哲郎

地域社会の中に 出番と居場所づくりを

平成十八年の日本人の平均寿命が、女性八五・八一歳、男性七九歳と過去最高となりました。昭和二十二年が、女性五三・九六歳、男性五〇・〇六歳ですから、この六〇年間で女性が約三二歳、男性が約二九歳延びたことになりました。また、合計特殊出生率が一・三二ですから、このままの状態が続けば間違いなく人口の減少は避けられず、まさに少子高齢社会といえます。これに家庭教育や学校教育の必要年数をあてはめてみると、親が五〇歳くらいになると子は家から独立していなくなりますし、学校教育もほ

とんどの人が二〇歳過ぎで終わってしまいます。そうになると、家庭には、子どものいない夫婦二人だけの生活がおよそ三〇年間（夫の退職後は約二十年間）も存在しますし、学校卒業後の六〇年間で得た知識や技術を食いつぶしながら生きていくことははや不可能なことは明らかです。このようにみえてくると、人生八十年の今後をどのように生きていくか、また教育をどのように考えた方がいいかが、個人的にも社会的にも大きな課題といえるのです。

を、想像してみましよう。特に、職場だけに人間関係を築き自分の居場所を作ってきたいわゆる企業戦士といわれる夫が退職し、生活力を持たない状態で家に戻ってきたとすれば、「粗大ゴミ、濡れ落ち葉」と邪魔者扱いにされるのはまだしも、妻から三行半が突きつけられる心配がありそうです。最近、夫の退職後の夫婦関係が原因で「主人在宅ストレス症候群」と診断される女性が増えていくようです。子どもの独立後が夫婦にとって「魔の時間」とならないよう、また「無所属人間」と言われないような生き

方が求められているので。この七月、関東一都六県の小中学生（約二千七百名）を対象に調査を行いましたのでその一部をご紹介します。まず「家庭が楽しいか」との間には、「楽しい」七〇・二%、「楽しくない」九・六%と答え、家庭が楽しい理由として、「家族の会話が楽しい」六七・七%、「自分の話を良く聞いてくれる」四六・七%などと答えま

す。この結果、家庭が楽しいと答える子どもは親子の信頼関係も強く、学校も楽しく友だち関係も良好な傾向にあることが分かりました。一方、放課後の過ごし方については、「ほとんど外で遊ばない」二九・九%、「友だちの家で遊ぶ」五五・七%、「自宅で遊ぶ」四九%、「同じクラスの子と遊ぶ」七九・一%と答え、狭い空間での生活が目立ちます。さらに「早く大人になりたいか」との質問には、「早くなり

たい」二六・四%、「なりたくない」二二・五%、「どちらともいえない」五一・八%と答え、なりたくない理由が、「子どもでいる方が楽だから」五七・八%、「大人になることが不安だから」三〇・三%、「責任を持たなければいけないから」二一・七%、「大人になると働かなくてはいけないから」二一・七%、「大人になると答え、たくましさどころか、将来に不安さを感じられる今の子どもたちの状況です。

企業戦士のな生き方をしてきた男性も今の子どもたちも、地域社会に自分の居場所がないことが問題なのです。そのうえ、自立心や生活力などが欠如しているとすれば、他に依存しない生き方が求められる長寿社会においては、長丁場の人生がとて辛いことになりそうです。





教授 堀川 貴司

古典籍に学ぶ

私が司書補講習「図書館の資料」を担当してから、もう四年目になります。縁あって鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科に着任した二〇〇四年以来のことです。

大学の授業では日本の古典籍（江戸時代までに日本で作られた書物）を取り扱うための学問である書誌学を主に担当しています。

「図書館の資料」も、ほぼ同じ流れに沿った内容なのですが、一つだけ違うのは、最後の五時間ほどで、実物の古典籍を一人あるいは二人で一点担当し、それまで受けた講義内容をふまえて調査し、その結果を口頭発表してもらふことです。使

用する古典籍は私の個人蔵書です。ほとんどは江戸時代か明治の初め頃までに刊行された、ごくありふれたものばかりですが、できるだけバラエティに富んだものに触れてもらおうと、文学以外にも、歴史・仏教・思想・医学・天文学あるいは観光案内書なども揃えています。

受講生の中には、既に図書館において実務経験のある方もいらっしゃるのですが、和紙でできた和綴じの書物は初めてだという方も多いようであり、はじめはとまどっている様子も見受けられます。しかし、次第にその世界

に没入していくと、調べることが面白くなっていくのか、いろいろな角度から熱心に質問をしに来てくれます。

近年は、各地の図書館や研究機関、博物館などのホームページが充実し、また個人でもかなり専門的なサイトを運営している方がいて、ネット検索をすると、調査対象の古典籍に関連する記述が、思わぬところに見つかる場合があります。もちろん、定番の国立国会図書館や国文学研究資料館のデータベースは充実していますが、私も知らない優れたサイトを見つけて、発表に活かしておられる方も多く、こちら

も勉強させてもらっています。そして、改めて、古典籍の世界は広くて深い、との感慨を新たにしています。

この授業の最初に強調することは、人文科学にとって、図書館とは単なる調査の手段（参考資料や研究書）が置かれている場所ではなく、研究の対象そのものが所蔵されている場所であること、それが自然科学や社会科学の多くの分野とは決定的に異なることです。私たちにあって図書館は命の綱と言ってもよいものです。特に古典籍をしっかりと収集・保存している鶴見大学図書館のようなどころには感謝するのみです。

古典籍には、先人の叡智が詰まっています。人類が文字を發明して以来、さまざまな情報を時空を超えて人々に伝える究極の手段となった「書物」というモノの歴史を

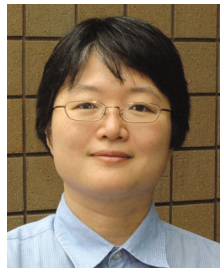
見つめ、その流れを受け止めて未来へとつなげていくために、書物の番人であり優しい道案内である司書という仕事にますます期待をしています。どうしても敬遠され、死蔵されがちな古典籍ですが、それぞれの図書館において日頃から、一点一点の古典籍が無言で語りかけてくる言葉に耳を澄まし、その価値を的確に評価し、多くの人々の利用に供することができるようになっていただけたらと切に願っています。

翻刻や注釈の方法を紹介しながら、さまざまな参考図書やデータベースなどの利用方法、論文の探し方・読み方なども説明し、学生が卒業論文を作成する際にも参考になるような内容を心掛けています。そして、書誌学についてもサワリだけは話

していただくこと、調べることが面白くなっていくのか、いろいろな角度から熱心に質問をしに来てくれます。

近年は、各地の図書館や研究機関、博物館などのホームページが充実し、また個人でもかなり専門的なサイトを運営している方がいて、ネット検索をすると、調査対象の古典籍に関連する記述が、思わぬところに見つかる場合があります。もちろん、定番の国立国会図書館や国文学研究資料館のデータベースは充実していますが、私も知らない優れたサイトを見つけて、発表に活かしておられる方も多く、こちら





2度目の 講習を終え

宇留間 郁子

夏の2カ月間の講習も終わり、また図書館を利用される方々と向き合う毎日が戻ってきます。この2カ月間の講習では、先生方より図書館で働くための視点を様々な角度から教わることが出来ました。テストに関しましては、正直全くと言って良いほど余裕はありませんでしたが、本当に楽しい2ヶ月間を過ごさせて頂きました。

情報はバラエティーに富み、業務上のみでは得られない貴重な知識・情報を教えて頂きましたが、実際にそれを図書館の中でどの様に活用・実行すればよいのか分からぬまま、今までを過ごして来てしまいました。

分かりやすいのではないかと回答を待つ利用者に思いを巡らし、時間の足りなさに慌てつつも、意外な事にこれらを楽しんでいる自分がいきました。3年間という「実務経験」は、先生方の講義に対し私により具体的なイメージを与えてくれたようです。今回教えて頂いた事は、全て入り口に過ぎないと言われた先生方の言葉を忘れず、これからもしっかりとした「実務経験」を積み重ねて行きたいと、今思っています。

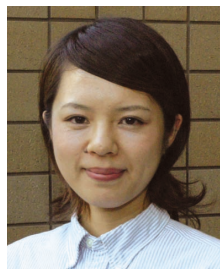
暑く、濃い夏が終わりました。同じ志を持った仲間と共に切磋琢磨したこの一夏を振り返ると、試験やレポートに追われて苦しい日々も懐かしさ、寂しささえも感じます。

講習を受ける前、私が最も楽しみにしていたのは、古文書の調査や郷土資料の収集について学ぶ講義でした。仕事で古典籍の調査・整理を行ったことがあり、この分野にとっても興味があったからです。実際に講習が始まると、その内容の奥深さや難しさ、あるいは先生方の実際の経験に基づいたお話などに引き込まれ魅了されていきました。

私のお話は、強く私の心に響いています。レファレンスサービス演習に取り組んでいた日々も、印象深く心に残っています。課題の多さと難しさに苦しみながらも、先生からいただいた「ひとつひとつの課題を丁寧にこなすこと」というアドバイスを意識して大学図書館を右往左往した数日間は、とても充実したものでした。無事に提出し終えたあと、心地よい達成感と共に、実際の業務の中で利用者からの質問に対して的確な答えを導きだし、利用者の喜ぶ顔を見たときの嬉しさとはこのようなものだろうか、と感じたことを覚えていきます。

さらに、年齢も性別もバックグラウンドも違う沢山の仲間たちと出会えたことはとても刺激的なことでした。常に真摯な姿勢で講習に臨み、疑問や難問について討議を重ねる仲間達の姿は、いつも私の力を奮い立たせてくれました。この講習で学んだのは司書に必要な知識だけでなく、何事にも真剣に取り組む姿勢と好奇心を持つて挑戦することの素晴らしさでもあったと思います。

最後になりましたが、熱心に丁寧に指導下さいました諸先生方、事務の方々を始めとする大学関係者の皆様、大変お世話になりました。講習で学んだことを糧に、今後の社会生活を邁進していきたいと思っております。

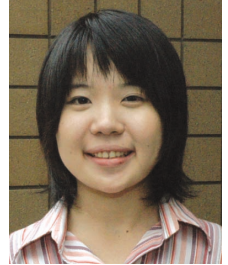


充実した夏

天野 聖恵

受講生

司書補



色濃く
過ぎ去った夏
橋本 さやか

気を引き締めて迎え挑んだ夏は、気付けばもう後姿となっていました。目まぐるしい速さで過ぎ去った二ヶ月間の司書補講習はとても濃密な毎日でした。

今年から公共図書館に勤め始めた私は、右も左も分からないまま現場で動き、自分の知識の無さを痛感し痺しい日々を送っていました。そんな中、司書補講習で知識の土台を養える機会はとて有難く、実践とそれに基づいて帰ろうと意気込んでいました。

講習期間休職する代わりに必ず司書補資格を握り締めて帰らなければならぬ事もあり、講習が始まって数日間はガチガチに固まった状態での受講でした。緊張状態での6時間聴講は心身共に疲

あり、こちらとしても積極的に授業に参加できました。授業外では図書館業務での相談に乗ってもらった事も。先生方から得られた全てを吸収して、また仕事に戻りたいと思えます。

日が経つにつれて休み時間に会話する受講仲間が増えていく事で、段々余裕を持った心境で講義と向き合えるようになりました。昼休みもノートを見つつ意見を交わし、互いの図書館事情を語り合う事で更に視野を広げた状態になり、聞くだけで精一杯だった先生の言葉を自分の中で碎きながら考えられる授業となりました。

一方的な講義ばかりでなく、私達の意見や発言を求められる場面も多々あり、こちらとしても積極的に授業に参加できました。授業外では図書館業務での相談に乗ってもらった事も。先生方から得られた全てを吸収して、また仕事に戻りたいと思えます。この度は沢山の方々を支えられて講習を無事終える事が出来ました。ご教授頂きました先生方、常に気をかけてくださいました事務局の皆様、共に二ヶ月を同じ教室で過ごした受講生の皆さん、そして笑顔で送り出してくれた職場の関係者に感謝の気持ちでいっぱい。この司書補講習を第一歩として更に図書館運営に貢献できるように尽力していきたいと思います。本当に有難うございました。

受講生

司書補



もつとも
充実した夏
秋元 良之

「とうとう終わった」というのが、夏期講習を終わりの率直な感じ。当初、真夏の二ヶ月近い期間、妻を残して一人で生活せざるを得なくなる事、体調や66歳ということでも不安もありました。しかし、図書館学を体系的・系統的に学べるまたとない機会だし、みんなと一緒に学習できるという快い緊張感、学ぶということに年齢は関係ない、という思いが不安に打ち勝ち、長野県の海拔1300メートルにある我が家を後にしました。

精銳の講師陣による講義は期待していた以上のもので、どの講師もユニークでしかも個性的でした。最新の内容を、懇切・丁寧に教えていただききました。図書館をとりまく社会状況と、図書館

に求められている諸問題、そこでの司書・司書補の役割りなど、最新の技術と知識を学ぶことができたことは、大きな収穫でした。同時に、この講習を昭和29年から続けてこられた鶴見大学と先生方のご努力に、心から感謝したいと思えます。

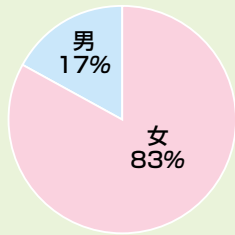
わたくしごとですが、毎時限、先生方の講義をひとつひとつ聞きもらすまいと臨んだのですが、記憶の衰えはいかんともしがたく、申し訳なく思っております。また、現役時代、様々な資料にかかわっていたこともあって、「目録の作成」作りでは、自然に鉛筆がすすんでしましました。レファレンスでは、時間との勝負で大汗をかくて取り組んでいたことを思い出しながら、いまの検索方法の格段の

進歩に、つくづく時の経過を感じました。今年の夏は暑さが厳しく、先生方にはいつも生徒の体調を気遣っていただきました。事務のみなさんには、講習前後の処理や連絡をできばきとやっていただき、よい受講環境をつくってくださいました。また、警備の方はいつもにこやかなあいさつで、気分よく学校に出入りできました。そして、先生との交流、生徒同士の話や情報交換も楽しく、ここで学んだこととあわせ、わたしの「財産」となりました。これらを、地元図書館に少しでも役立てることができれば、と思っています。みなさん、ありがとうございます。

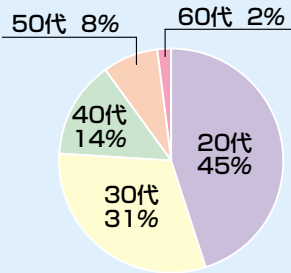
アンケート

◆平成19年度司書講習アンケート集計結果◆

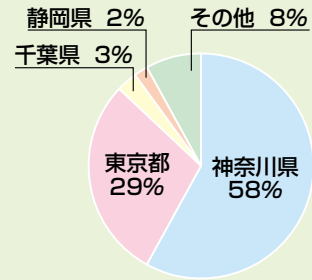
男女別データ



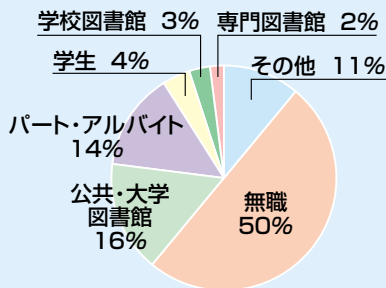
年齢別データ



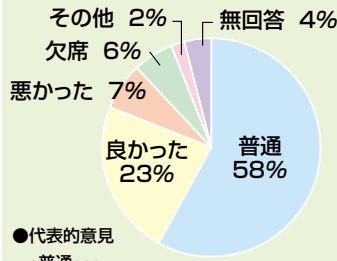
出身県別データ



職業別データ



特別講義について



●代表的意見

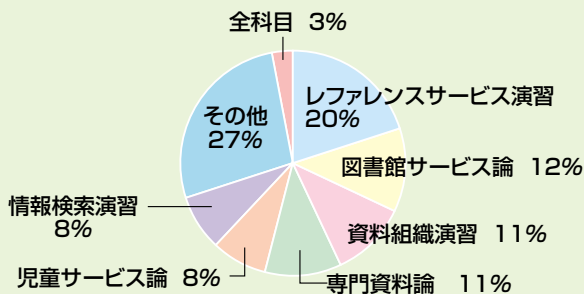
- ・普通・・・
テーマ・内容はとても有意義で面白かったが、ワークショップの時間が短かく、残念だった。
- ・良かった・・・
海外の貴重な話を聞いて、とても有意義だった。最後のワークショップでは積極的に意見が出せず後悔もあるが、とても面白く勉強になった。
- ・悪かった・・・
時間も無く、内容が専門的で、難しすぎた。

感想

●主な意見

- ・講師の先生方も設備も、すべての環境が良かった。集中して受講することができた。
- ・理論から実践まで幅広く学べたと実感している。
- ・大変だったが、とても有意義な2ヶ月間だった。この経験を活かして次に繋げたいと思う。
- ・図書館は、蔵書・PC・データベースなど、充実していて素晴らしい。快適に利用できた。
- ・すべての教室で全体的に冷房がきつく、上着を着ても寒かった。
- ・クラスごとの授業では、授業内容や試験をできるだけ統一してほしい。
- ・2ヶ月間、先生方・事務の方々お世話になりました。ありがとうございました。

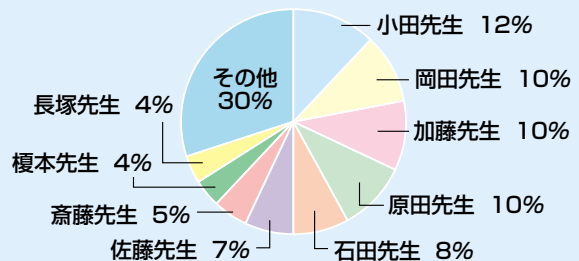
印象に残った科目



●主な理由

- ・レファレンスサービス演習・・・
少ない時間で課題をこなすのは大変だったが、やりがいがあり、とても楽しかった。終わったときに達成感があった。
- ・図書館サービス論・・・
講義内容が具体的に面白く、仕事に役立つ内容だった。得るものが多かった。
- ・資料組織演習・・・夢中で取り組んだ。とても充実していた。
- ・専門資料論・・・短い時間だったが、とても面白かった。

印象に残った講師



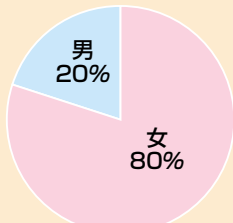
●主な理由

- ・小田先生・・・
授業内容・進め方・教材どれも素晴らしく、集中して学ぶことができた。とても充実した授業だった。
- ・岡田先生・・・
とても親しみ易く、丁寧に教えてくれた。先生の授業を受けたおかげで、演習がより良くなった。
- ・加藤先生・・・
論点、主張が明解で、現場の状況をわかりやすく講義してくれた。素敵だった。
- ・原田先生・・・
正直な授業ではなかったが、何度質問しても丁寧に答えて下さり、優しさや厳しさをあわせもった先生だった。授業とはこういうものだと思えさせられた。素晴らしかった。

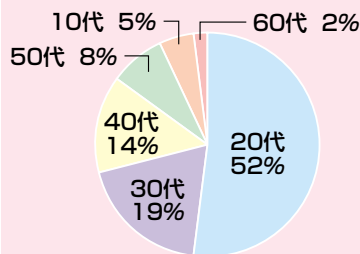
アンケート

◆平成19年度司書補講習アンケート集計結果◆

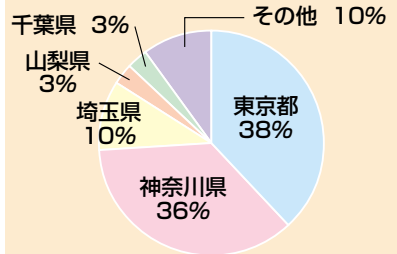
男女別データ



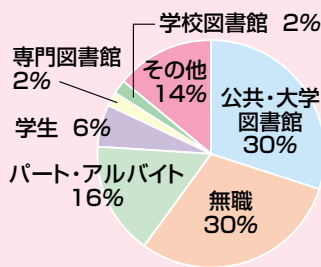
年齢別データ



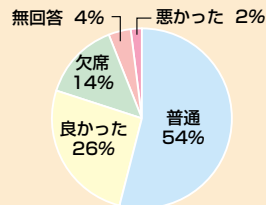
出身県別データ



職業別データ



特別講義について

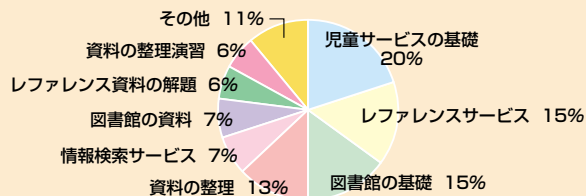


- 主な理由
- ・普通・・・最後のワークショップの時間がなく、意見をまとめるのが大変だった。話は面白かったが、英語だったので分かりづらかった。
 - ・良かった・・・視野を広げることができた。普段は聞けない話を聞いて大変勉強になった。

感想

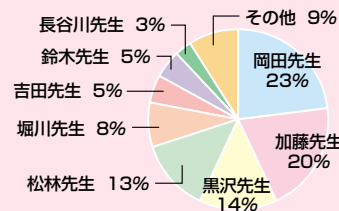
- 主な意見
- ・講師陣の熱心な授業で、とても有意義な時間を過ごすことができた。
 - ・パソコン初心者講習があったことが、心強かった。
 - ・勉強が楽しく、終わってしまうのが残念だった。
 - ・実際の仕事に役立つ内容ばかりで、とてもためになった。
 - ・厳しい内容だったが、やり遂げることができて自信につながった。
 - ・施設は充実し、図書館もOA研修室もつかいやすかったが、寒かった。
 - ・短い間でしたが、お世話になりました。

印象に残った科目



- 主な理由
- ・児童サービスの基礎・・・多くを考えさせられる、興味深い内容だった。読み聞かせをしたり、クラスの人の読み聞かせを聞くことができて楽しかった。
 - ・レファレンスサービス・・・自分で調べてレポートを仕上げるのが大変だったが、とても面白かった。
 - ・図書館の基礎・・・とても面白くわかりやすい講義だった。
 - ・資料の整理・・・業務をする上で大変役に立つと思った。丁寧でわかりやすい授業だった。

印象に残った先生



- 主な理由
- ・岡田先生・・・お話が面白くて、楽しく勉強できた。非常に解りやすく、生徒の立場に立った親切的な講義だった。
 - ・加藤先生・・・教科書的でない、図書館の仕事の面白さを語ってくれた。幅広く難しい内容を、わかりやすくユーモアを交えて教えてくれた。
 - ・黒沢先生・・・現場の生の声の講義を受けられて良かった。先生の読み聞かせの技術がすばらしく、感動した。
 - ・松林先生・・・厳しかったが、わかるまで教えてくださる熱意があつてよかった。歯切れ良く、テンポ良く、とてもわかりやすかった。

■司書・司書補講習の歩み■

鶴見大学の司書・司書補講習は、昭和29年(1954)の開講以来、今年で53年目を迎えました。この間、優秀な修了者を多数輩出し、多くの先生方によるご指導を受け、本学の講習は成長してまいりました。そして昭和38年には「一夏会」が発足し、この会報の由来ともなっております。また、平成9年には大会学館での講習がスタートし、JR鶴見駅から徒歩1分という恵まれた環境で講習を行うことができるようになりました。

施設面では、約60台のパソコンからなるOA研修室、73万冊にも及ぶ質の高い蔵書群を所蔵しコンピュータを駆使した高度な情報提供機能を持っている図書館の使用など、時代のニーズにふさわしい講習を行っております。

本学司書・司書補講習は、これらの歴史と数多くの優秀な修了者を誇りにこれからも発展を続けていきます。

【司書・司書補講習受講生の皆様へ】

アンケートにご協力頂きましてありがとうございました。このアンケート結果を参考に今後もより良い講習にしていきたいと思っております。また、この一夏会報を刊行するにあたり、原稿をご執筆いただきました先生方・受講生の方々に深く感謝申し上げます。

真夏の暑い中、2ヶ月間お疲れ様でした。